

## 統計の信用

こんなことをいつたひとがある。「世の中には三つのウソがある。それは、口に出しているウソと、知らぬ顔をしてだまつているウソと、統計とである」と。いわれていることの当否はともかくとして、警句としては、なかなか秀抜だと思わざるを得ない。情報化時代の到来などといつて、統計がますます重要視され、多用されようとしているとき、統計の作成者にとつても、利用者にとつても、心のどこかにとどめておいて、自重の一助としていいコトバだとは思ふ。

さて、統計あるいは統計数字に対するひとびとの態度には、おおまかにみて、三つのタイプがあるように思われる。そのひとはいわば盲信型で、他のひとは昌頭にのべたような不信型、そして第三は、統計をそれが作られた約束や背景を知つて、定められた目的のために正しく（あるいは上手に）使おうとするタイプである。第三の態度が望ましいことはいふまでもないであろう。

ところで、ここでは、第二のタイプである統計に対する不信がどうして生まれることになるのだろうか、それについて、二、三思いつくままに書いてみたい。

統計に対する不信は、まず、統計の精度に対する過大な要求からくる。統計の誤差は、一般的にいって、さけることができないものである。調査の設計、実施および集計製表の各段階を通じて、統計マンは「誤差とのたたかい」に終始するわけであるが、人間が行なう仕事である以上、精度に限度があるのはやむを得ないことである。統計を含めて、われわれの行動の指針となる情報には、完ぺきなものはほとんどないといつてよからう。もし、情報の不完全さを理由に、それを将来の行動に生かすことを拒むとしたら、そのひとは何こともなし得ないであろう。

統計に対する不信は、つぎに、統計の結果が、必ずしもひとびとの実感にピッタリくるものではないという事実から生まれるように思われる。たとえば、家計調査の1世帯当たり平均所得額や貯蓄額、そして物価指数などである。とくに、物価指数が実態を反映していないという批判をきくことが多いが、これは、これらの数字が「平均」といういわば架空の産物であることを忘れての発言であることがすくなくないように思われる。消費者物価の場合であれば、各種の品目の物価の上昇または下落率が、平均的世帯の費目別支出額構成比に応じて平均されるわけだから、費目別構成が平均的世帯のそれとちがう個々の世帯が、実感とのズレをいつてみても見当ちがいというべきであろう。だからといつて、物価指数の算定上、調査品目の選定や計算方法などのうえで、よりよく実態を反映するための努力が必要なことを否定するものではないが。

統計に対する不信の第三の要因として、こんどは、利用者の責任に帰すべき統計の誤用、悪用がある。利用者の誤用や悪用が、第二の利用者に、統計不信をもたらすわけである。統計を自分に都合のいいようにだけ、あるいは都合のいい統計だけを「利用」（悪用）することは論外として、統計の誤用は案外多いのではあるまいか。これには、調査事項の定義や調査の方法などに対する無知（または無視）による場合と、統計数字のあやまつた（あるいは勝手な）加工（たとえば、正しくない比較や相関関係の曲解、平均の濫用、分散の無視など）による場合とがある。こうした統計の誤用は、充分な注意と統計学の正しい知識とによつて、かなりの程度に防止できるものである。

情報としての統計への需要は、今後とも、質量ともに増大しつづけるであろう。かくて、統計関係者の精進、努力と、統計調査の対象となるひとたちの理解ある協力、そして統計利用者の建設的な批判や提言がいつそう期待されることになる。これらのどれひとつを欠いても、信頼される統計の発展はあり得ないであろう。

県統計課 宇留野真一郎